慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	詩人としての蒲松齢
Sub Title	Pu Songling as a poet
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.80- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

詩人としての蒲松齢

八木章好

清初の蒲松齢（一六四〇―一七一五）の詩について、筆者は以前に、その流伝状況の概述及び慶應義塾大学所蔵資料の紹介、さらにその詩風に関して特に中唐の詩人李賀の影響について考察したことがある。(1) 本稿では、蒲松齢の詩作全般にわたって、その詩人としての環境及び詩風・詩論を考察し、『聊斎志異』の作者としての蒲松齢とは別の観点から、詩人として蒲松齢をとらえ、その人物像をより総合的に把握するための一つの試みとしたい。

蒲松齢は明の崇禎十三年（一六四〇）、山東省淄川県郊外の蒲家荘という村に生まれた。順治十五年（一六五八）、十九歳で県・府・院各試に首席で合格する。当時院試を主宰した学政が施閏章（号愚山）であった。官界に名を馳せる一流の文人にその才を認められたわけであるが、その後は挙業には全く振るわず、郷試にはついに合格しないままに終わった。康熙九年（一六七〇）、三十一歳の秋から翌年の夏まで、同郷の孫蕙の幕賓として江南を遊歴し、帰郷の後は、淄川県西郊の畢家で館師（住込みの家庭教師）として約三十年間の歳月を過ごす。晩年は自宅に隠居し、康熙五十四年（一七一五）、七十六歳でその生涯を閉じた。幕賓として一年足らず遠遊し、幾度か郷試受験のために済南に赴いた以外は、七十六年間の生涯のほとんど全てを郷里の淄川で送っており、その活動範囲はきわめて狭い。蒲松齢の実生活は

変化に乏しい平凡なものであった。

蒲松齢は、郷里淄川において二つの詩文のサークルに属していた。一つは、張篤慶・李堯臣ら同年輩の詩友によるものであり、もう一つは、畢際有・高珩・唐夢賚ら淄川の名士たちによるサロンである。

順治十六年（一六五九）、秀才の資格を得て県学の生員となった翌年、蒲松齢二十歳の年に、同県の張篤慶・李堯臣・王鹿瞻らと詩社を結成し、郢中社と名付けた。蒲松齢の筆による「郢中社序」[2]には、そのいきさつが次のように述べられている。

> 謝家は風を嘲り月を弄し、遂に学士の章程たるに足るか。余、其れ然りと謂わず。顧うに当今の時芸を以て士を試すは、則ち詩の物たるや亦た魔道なり、分以外の者なり。然るに酒茗の燕好は、人人之れ有り。而して夫の酒朋賭社を窺い見れば、両両相徴逐し、笑謔哄堂して、遂に太真終日鄙語無きが如くに至る。しからざれば則ち、喝雉呼盧し、以て永夜を消し、一たびにして千金を擲ち、是れを豪となすのみ。精神を豪呼に耗し、光陰を酔夢に擲てるは、殊に惜しむべきなり。
>
> 余、李子希梅と与に東郭に寓居し、王子鹿瞻、張子歴友諸昆仲と一埤堄の隔たりあるのみ。故に不時に相晤うを得、晤いし時は茗を瀹て談を傾け、晷を移して乃ち散ず。良朋、首を聚むるに清談のみを以て之れを了るべからずと思うに因り、約して譔集の餘晷を以て興を寄す生涯を作さんとす。聚まるに固より時を以て限らず、詩も亦た格を以て拘らず。成りし時、共に一巻を載す。遂に郢中を以て社に名づく。

ここには、世俗と敢えて異なろうとする若き詩人たちの意気込みが感じ取れる。科挙を志す者にとって、「時芸」すなわち八股文が正道であれば、詩は「魔道」であり、「分以外」のものであった。「格に拘らない」詩であればなおさらで

ある。

郢中社の中でも蒲松齢と特に親交の深かったのが、李堯臣と張篤慶の二人である。李堯臣は、字を希梅、号を約庵と称した。蒲松齢より三歳年下で、仕途には不遇で生員のままに終わったが、家柄は比較的裕福であった。蔵書家であり、また金石にも精通していた。蒲松齢の「醒軒日課序」[3]に、

李子希梅、余と范・張の義有り。甲辰春、我に筆硯を共にせんことを邀む。余、書を携えて之れに就けり。朝に明窓を分かち、夜に灯火を分かち、相与に以て成せること有るを期せり。

とあるように、蒲松齢を自宅に招いて昼夜勉学を共にした時期があった。

張篤慶は、字を歴友、号を厚斎と称した。蒲松齢より二歳年下で、蒲松齢と共に早くから施閏章の知遇を得た。康熙二十五年拔貢生となり、翌年国子監に入るが、その後、郷試にはついに受からず、蒲松齢と同様に館師として生計を立て、晩年は郷里の嵎崮山下に隠棲した。郢中社の詩友の中では最も詩名が高く、当時の詩壇の領袖である王漁洋ともつながりがあり、『漁洋詩話』巻下に、

張篤慶……文章は淹博華贍にして、千言立ちどころに就すべし。詩は尤も歌行を以て場を擅にす……丙戌、新城に客となり、余と与に倡和すること数十首を下らず。

とある。詩壇においては王漁洋の同道者とされており、郎廷槐撰『師友詩伝録』の中でも、王漁洋と並んで、郎廷槐の詩に関する問いに答えている。

李堯臣・張篤慶共に、境遇は各々異なれど、結局は蒲松齢と同様に科挙には不遇の生涯であった。三人の交友は郢中社結成以来、晩年に至るまで継続する。康熙四十九年、蒲松齢七十一歳の作〈張歴友、李希梅為郷飲賓介、僕以老生、

参與末座、歸作口號〉、

憶昔狂歌共夕晨　憶うは昔　狂歌して夕晨を共にし
相期矯首躍龍津　相期す　首を矯げて竜津に躍らんと
誰知一事無成就　誰か知らん　一事として成就する無く
共作白頭會上人　共に白頭会上の人と作らんとは

成す事もなく年老いて郷飲酒礼の座にあり、青雲の志を抱いた若き頃を回想した自嘲的な詩である。蒲松齢の生涯の縮図でもある。

康熙九年、蒲松齢三十一歳の年に、同郷の先輩孫蕙（字樹百）の招きに応じて幕賓として江南の地へ赴く。幕賓となった理由は、王洪謀撰〈柳泉居士行略〉[4]などの記載によれば、経済上の必要性であったとされるが、あるいは科挙での躓きに悶々とした日常からの逃避の意図も含まれていたのかもしれない。いずれにしても、蒲松齢の南遊は、積極的な動機によるものではなかったようである。

南遊期には比較的数多くの詩がのこされている。『聊斎詩集』の総数約一千首のうち、百数十首をこのわずか一年足らずの時期のものが占める。郷里とは異なる江南の風物に触発されて、大いに詩想をかきたてられたところであろうが、蒲松齢が江南の芳草に感じたものは、胸中の豪気を発揮する場のない自己の境遇に対する憤悶の情と客愁の念ばかりであった。〈漫興〉、

芳草青青客未歸　芳草青青として　客未だ帰らず
煙波無盡夕陽微　煙波無尽にして　夕陽微なり

漁舟閒傍蓼灘繫　漁舟　閒かに蓼灘に傍いて繫ぎ
燕子斜依藕葉飛　燕子　斜めに藕葉に依りて飛ぶ
湖海氣豪常迕世　湖海の気は豪にして常に世に迕う
黃昏夢醒自知非　黄昏に夢より醒むれば自ら非なるを知る
年年蹤跡如萍梗　年々蹤跡　萍梗の如し
回首相看心事違　首を回らし相看れば心事違えり

幕賓という職務は、青雲の志を抱く者の意にかなったものではありえない。豪気を取り巻くものは、他郷にある客愁であり、世に容れられない憤りであった。詩作から見る限りでは、江南での日々は決して楽しいものではなかった。かくして、蒲松齢は江南に居ること一年に満たずして帰郷する。

幕賓を辞して帰郷した後、蒲松齢は主に淄川西郊の畢家で館師として生計を立てる。諸々の資料から推定すると(5)、康熙十八年、蒲松齢四十歳の年に住込みを始め、その後、七十歳で退いて自宅に隠居するまで約三十年間の寒暑を畢家で過ごす。

畢家は淄川屈指の名門豪族であり、先代の畢自厳が明朝で戸部尚書にまで至ったのをはじめ、多くの人間を官界に送り出している。自厳の次男が畢際有で、江蘇省通州の知州となり、康熙三年に官を退き帰田した。蒲松齢は畢際有の招きにより畢家の館師となり、畢際有の死後は、その次男の畢盛鉅に引続き雇われた。畢家の人々との人間関係は円満であったようである。〈贈畢子韋仲〉連作五首は畢盛鉅との交情をうたう。

廿載金蘭道義薫　廿載　金蘭　道義薫り

青燈好月我同君　　青灯　好月　我は君と同にす

……

宵宵燈火共黃昏　　宵々　灯火　黄昏を共にす

十八年來類弟昆　　十八年来　弟昆の類し

また、同詩の処々に、蒲松齢の畢家での生活ぶりがうかがえる。

居齋信有家庭樂　　斎に居りて信に家庭の楽しみ有り

同食久如毛裏親　　食を同にすること久しく毛裏の親しみの如し

……

高館時逢卯酒醉　　高館にて時に卯酒の酔いに逢い

錯將弟子作兒孫　　錯りて弟子を将て児孫と作す

畢家の人々とは家族の一員同然の親しい交わりをしていたようである。畢家は大きな屋敷を構え、石隠園と称する庭園があった。蒲松齢は主に園内の綽然堂および倣嬰堂を講学の場とし、また自らの書斎とした。〈石隠園〉、

山光繞屋樹陰濃　　山光　屋を繞りて樹陰濃し

爽氣蕭森類早冬　　爽気　蕭森として早冬の類し

茅竹不因春雨瘦　　茅竹は春雨に因りて痩せず

海棠如爲晚妝慵　　海棠は晩妝を為すが如く慵し

〈讀書倣嬰堂〉、

桔槹聲醒邯鄲夢　桔槹(はねつるべ)の声　邯鄲の夢を醒まし
竹樹風搖枕簟涼　竹樹の風　枕簟の涼を揺るがす
夜色迢迢更漏靜　夜色迢迢として　更漏(こうろ)静かなり
一簾月影上匡牀　一簾の月影　匡牀に上(のぼ)る

石隠園は志を得ないままの蒲松齢にとって心の憩いの場であった。蒲松齢は石隠園を〝蓬萊〟〝武陵邱壑〟〝輞川〟などにたとえる。(6) 詩的比喩としての誇張にはちがいないが、少なくとも心にゆとりを持って周囲の風物を享受している様子がうかがえる。南遊期の詩にはついぞ見られなかった心境である。

畢家は蒲松齢にとって格別居心地の良い場所であったらしい。であるからこそ三十年もの歳月をそこで送ることができたのであろうが、畢家にとっても蒲松齢は単なる家庭教師ではなく、畢家一族の秘書のような役割を果たしていた。『聊斎文集』には、蒲松齢が畢家の人々のために代筆した数多くの書簡・婚啓・祭文などがのこされている。蒲松齢と畢家の人々との間には長年にわたる厚情と信頼関係が樹立されていた。また、石隠園内は自然環境が良いばかりでなく、綽然堂は畢家の蔵書の場でもあり、蒲松齢の受験勉強や文筆活動に都合が良いことは言うまでもない。詩文・雑著、そして『聊斎志異』など、蒲松齢の著作の大半はここで創作された。さらに、畢家が同じ淄川県内であるという地理的条件も蒲松齢にとってはうれしかったに違いない。住込みをしながらも、しばしば自宅へ戻り、家族と過ごす時間を持つことができた。しかしながら、こうした好条件にもまして、蒲松齢が畢家に居続けた最大の理由は、畢家が郷里において果たしていた文学サロンとしての役割である。畢家は、淄川の高珩・唐夢賚・張嶋・袁藩、そして新城の王漁洋ら名門豪族と姻戚関係や交友関係を持っていた。(7)『国朝山左詩鈔』『般陽詩萃』などをみると、彼らは互いに畢氏石隠

園、高氏載酒堂、唐氏志壑堂に、順々に場所を移しながら、頻繁に酒を交わし詩を賦し合っていたことがわかり、蒲松齢もこれに加わっていた。また、王漁洋と蒲松齢との交際については、すでにいくつかの論著で考証されている。[8] 蒲松齢の『聊斎詩集』も、こうした人々との応酬の詩が相当数を占めている。無位無冠の万年秀才がこうした身分のかけ離れた名士たちと交際を結び、詩文を応酬することができたのは、畢家の館師という立場によるものにほかならない。それは、蒲松齢の文学的欲求を満たすことであり、また、このサロンでの交わりの中から吸収したものも少なからずあったにちがいない。さらに、こうした人々に認められて出世の道が開けるかもしれぬという可能性をも秘めていたのである。詩人としての蒲松齢の環境は、その活動範囲はごく限られたものであるとは言え、人との交際の面では比較的恵まれたものであったと言ってよい。

さて、蒲松齢の詩は、現存するものは三十歳以降のもののみであるが、一部を除いて、ほぼまとまった編年詩集としてのこっている。詩集全体を通観すると、南遊期およびその後数年の詩と、比較的晩年の詩とでは、その詩風に明らかな変化がみられる。概して言えば、前者すなわち三十代の詩は、習作的なものや遊戯的なものが多い。南遊期の作品には、「故園已隔萬重山」(〈雨後次巖荘〉)、「一声欸乃江村暮」(〈途中〉)、「月落蘋花霜滿汀」(〈早行〉)など、[9] 人口に膾炙している詩句を露骨に典故として用いたものが目立つ。また、夢幻の中に現れる仙境を描いた長編の五言古詩〈爲友人寫夢八十韻〉のように艶麗華美な字句を連ねた頗る修辞的な詩や、〈樹百宴歌妓善琵琶、戲贈〉〈戲酬孫樹百〉など、とりわけ孫蕙との応酬の詩には、遊戯的に技巧を凝らした詩が多くみられる。また、この時期の詩に表されている憂愁や悲憤の情は、いずれも科挙での挫折に起因する自らの不遇に発するものであり、あくまでも個人的な範囲のものに限られる。〈夜坐悲歌〉、

黄河駭浪聲如雷　黄河の駭浪　声　雷の如し
遊人坐聽顔不開　遊人　坐して聴き　顔　開かず
短燭含愁慘不照　短燭　愁いを含み　慘く照らさず
顧影酸寒山鬼笑　影を顧れば酸寒として山鬼は笑う
半夜聞雞欲起舞　半夜　鶏を聞き　起ちて舞わんと欲す
把酒問天天不語　酒を把り天に問えど天は語らず
但聞空冥呑悲聲　但だ聞く　空冥の悲声を呑み
暗鎖愁雲咽秋雨　暗く愁雲を鎖ざし　咽びて秋雨となるを

これに対して、晩年になると、詩人としての蒲松齢の目は一転して自分の周囲の社会に向けられるようになる。〈餓人〉、

何處能求辟穀方　何処にか能く辟穀の方を求めん
沿門乞食盡逃亡　門に沿い乞食するは尽く逃亡のもの
可憐翁媼無生計　憐れむべし翁媼は生計無く
又賣小男易斗糠　又小男を売りて斗糠に易う

こうしたいわゆる社会詩的な傾向は康熙四十二年、蒲松齢六十四歳以降の詩にとりわけ顕著にあらわれている。〈流民〉〈離乱〉〈旱甚〉〈聞淄東無雨〉〈憂荒〉〈紀災〉〈道殣〉〈齊民歎〉など、この時期にみられる一連の作品はいずれも当時の天災・凶作による郷里の窮状を活写したものであり、南遊期の作品のようないたずらな修辞はもはやみられず、質朴

な筆致で周囲の社会の現実を描き上げており、杜甫の〈三吏・三別〉を彷彿とさせるものがある。

そして、七十歳にして帰田した後の最晩年の数年間の詩には、また新たな変化がみられる。長年の館師勤めで多少の貯えはできたはずであり、仕官への執着心も消えて、悠々自適の心安らかな余生を送る様子がうかがえる。〈斗室〉、

垂老倦飛戀茅衡　老に垂(なんなん)とし飛ぶに倦(う)み　茅衡(こう)を恋う
心境閒暇夢亦適　心境閒暇にして　夢は亦た適(かな)う

〈癭儒相習能相安　癭儒　相習い能(よ)く相安んず
與以廣堂我不易　与(あた)うるに広堂を以てするも我は易(か)えず

このように、編年の『聊斎詩集』を通観すると、年代を追って詩風に根本的な傾向の変化がみられる。これは蒲松齢の詩人としての視点の変化であり、また、人生観、世界観の変化をそのまま反映したものとみてよい。

こうした時間にともなった変化とは別に、『聊斎詩集』全般において、蒲松齢の詩には、いくつかの注目すべき特色がみられる。

まず、蒲松齢の詩の多くは散文的な筆致であり、なかでも、志怪小説的色彩の濃いものが少なくない。例えば、

龍精蛟怪　蝌蚪を擁(いだ)く（〈射陽湖〉）
黄狐跳踉し黒狐叫ぶ（〈輓淮陽道〉）
禪院荒涼として鬼物憑(つ)く（〈閏月朔日、青雲寺訪李希梅〉）

蒲松齢は『聊斎志異』の世界においてのみでなく、詩人としても、自然の観察が多分に志怪的感受性を帯びていたようであり、鬼・狐・精・怪の類を詩の素材として用いることが多い。とりわけ〈撃魃行〉などは、長編古詩の形式をとり

ながらも、その内容は一篇の志怪小説と変わるところがない。〝魃〟は旱を起こす鬼怪をいう。

旱民憂旱訛言起　旱民　旱を憂えて　訛言起こる
造言魃鬼殃羣農　造言す　魃鬼　羣農を殃い
墳中死者瘞三載　墳中の死者　瘞ること三載にして
云此枯骸能爲凶　云に此の枯骸　能く凶を為せりと

そこで村人たちは棺をあばき死骸を打ち砕く。それを墓主が訴え、村人が罰せられるという話。詩は更に続き、類似した別の話を記す。

發柩蒼鼠竄禾叢　柩を発けば　蒼鼠　禾叢に竄る
逐鼠不獲逢野叟　鼠を逐って獲ず　野叟に逢う
羣疑魃鼠化老翁　羣　疑う　魃鼠　老翁に化せりと
目瞠口吃嗡不合　目を瞠り口は吃り　嗡として合わず
一挺踣地羣戈椿　一たび挺り地に踣れ　羣戈　椿く

そして詩の末尾には『聊斎志異』の「異史氏曰」と同様のコメントが付く。

齊魯被災八十處　斉魯　災を被るところ八十処
豈有百鬼盈山東　豈に百鬼の山東に盈つること有るや
旱魃倘(10)能格雨露　旱魃　倘し能く雨露を格めば
帝天高居亦瞶聾　帝天　高居すれども亦た瞶聾なり

莫挽天行陥殊死　　挽しむ莫れ　天行の殊死に陥らしむること
哀哉濫聴眞愚蒙　　哀しい哉　濫りに聴き　真に愚蒙なり

このほかにも、前述の〈爲友人寫夢八十韻〉などは〈遊仙窟〉に類する仙境の艶情故事を扱ったものであり、韻文でありながら、伝奇小説的な内容を持つ。また、〈田雀行〉〈日中飯〉〈養猫詞〉〈養蠶詞〉〈麻姑雀〉〈驅蚊歌〉〈蝗来〉〈捕蝻歌〉〈彈烏行〉〈老翁行〉〈老婦行〉などは、ごく日常的な生活のひとコマをこと細かに描写した古詩である。周囲の些末な出来事に対する細かな観察の上に創作を加えて仕立てている点は、多分に散文的、小説的である。その多くは、民衆の窮状を描いたものではあるが、先に述べた晩年の一連の社会詩とは異なり、深刻な印象は薄く、コミカルでさえある。なかには、次のような諧謔的な連作もみられる。

人生過客耳　　人生は過客なるのみ
殷勤謝吾齒　　殷勤に吾が歯に謝す
欲別不相留　　別れんと欲し相留めず
何須復爾爾　　何ぞ復た爾々たるを須いん（〈告歯〉）

……

六十有餘年　　六十有余年
爲君嚼蘆虆　　君が為に蘆虆を嚼す
骨肉欲相離　　骨肉相離れんと欲するに
寧不爲一痛　　寧ぞ為に一たび痛まざる（〈歯答〉）

蒲松齢の詩風は、このように『聊斎詩集』全般にわたって、形式・内容共にさまざまに異なる詩が雑然と混在しており、特定の一語一句でその詩風を総括することが難しい。また、蒲松齢が標榜する歴代の詩人にも、その特定の基準や傾向が考えにくい。李賀の影響は極めての濃厚であるが、これはおおむね三十代の詩に限られる。杜甫の影響はより広範にみられるが、しかし『聊斎詩集』を総じてこれを杜詩風であるとは言い難い。李賀や杜甫のほかに、阮籍・李白・蘇東坡らも『聊斎詩集』の中に登場する。これら自由奔放で豪爽な詩人たちの生き方は、浪漫的資質を持ちながらも実生活においては地味で平凡な生涯を送った蒲松齢にとって、常に心に意識し羨望していた人間の姿であったのかもしれない。また、陶淵明の詩句も多用しているが、これは遠遊からの帰郷や晩年の帰田閑居の詩に目立つ。蒲松齢は、その時々の心境や境遇に合わせて、その都度、古来の詩人に自分の姿を投影させているかのごとき印象を与える。さまざまな異なるタイプの詩人を各々異なる観点から敬慕し模倣したわけであり、蒲松齢自身ひとりの詩人として確固たる詩論があって、それに基いて特定の詩人や詩派に傾倒し追随したのではない。唐詩・宋詩のいずれか一方への偏向もなく、また、王漁洋の神韻説の影響を受けた跡もみられない。こうしてみると、蒲松齢は、詩人としてはとらえどころがなく、詩集全体が雑然とした不統一な印象を与える。張鵬展の『聊斎詩集』序[11]に「境に因りて情を写し、体裁は一ならず」と評される所以である。

最後に、『聊斎詩集』と『聊斎志異』の関係について若干触れておきたい。

まず、『聊斎詩集』の中には〈途中〉〈感憤〉〈寄懐張歴友〉〈偶成〉など、『聊斎志異』執筆の動機や背景がうかがえるものがいくつかあり、また、『聊斎詩集』の〈俠女行〉と『聊斎志異』の〈俠女〉のように、共通の題材を扱ったものがある。しかし、こうした例はごく少数であり、また表面的な問題でもあり、両者の関係を論ずる材料にはなりえな

い。むしろ、蒲松齢にとって、詩文と志怪とのジャンル区分は、いわば現実の世界と夢幻の世界という精神生活上の区分でもあり、両者は本質的に別個の基盤に立つものと考えた方がよい。

また、比較的若い頃の詩と晩年の詩とでは詩風に相違がみられることは先に述べたが、『聊斎志異』についてもやはり同様のことが言える。『聊斎志異』においても、晩年の作品の方がより社会的な視野に立って書かれたものが多い。(12) 両ジャンルにおけるこうした視点の変化はそのまま蒲松齢自身の内面の変化として言えることであり、蒲松齢の人物論を扱う上では重要なポイントの一つである。

さらに、前述のように『聊斎詩集』の詩風が雑然として多種多様である点は、『聊斎志異』の志怪としての性格に類似している。蒲松齢は、詩においても志怪においても、そのジャンルの本来あるべき格式に対して極めて無頓着であり、規範的な枠や一定の型にはめることを嫌う。伝統的な正道に拘泥することなく、雑然といろいろなものを無節操なまでに自由に取り込んで、そこに独自の文学の世界を構築している。これはおそらく自覚的な文学史観の上に立ったものではなく、伝統の拘束が弱い無位無冠の文人としての立場の気楽さによるものであり、また生来の性分によるものであろうが、いずれにしても、千篇一律で没個性的になりがちな志怪のジャンルにあって、『聊斎志異』がひときわ異彩を放つのも、蒲松齢のこうした文学に対する姿勢から生まれたもののように思われる。

注

(1) 「聊斎詩研究序説」(「芸文研究」第四十五号)、「蒲松齢児孫鈔本聊斎詩草校勘記」(同第四十六号)、「蒲松齢と李賀」(同第五十四号)参照。

(2) 『蒲松齢集』所収『聊斎文集』巻三。

(3) 『蒲松齢集』所収『聊斎文集』巻三。
(4) 〈柳泉居士行略〉〝家貧不足自給、遂從給諫孫公樹百於八宝〟。
(5) 袁世碩『蒲松齢事迹著述新考』(一九八八年斉魯書社)の「蒲松齢在西鋪畢家」の章参照。
(6) 〝忽疑到蓬萊、海水漾清浅〟(〈和畢盛鉅石隠園雑詠〉)、〝紅點疎籬綠滿園、武陵邱壑漢時邨〟(〈石隠園〉)、〝雞犬聲添村舎色、桔槔水入輞川圖〟(〈畢刺史傚樊堂落成〉)。
(7) 蒲松齢の交友関係については、注(5)『蒲松齢事迹著述新考』上編の各章に詳しい。
(8) 前野直彬『蒲松齢伝』(昭和五十一年秋山書店)の「漁洋山人」の章、および注(5)『蒲松齢事迹著述新考』の「蒲松齢与王士禎交往始末」の章参照。
(9) 引用詩は各々、〝輕舟已過萬重山〟(李白〈早發白帝城〉)、〝欸乃一聲山水綠〟(柳宗元〈漁翁〉)、〝月落烏啼霜滿天〟(張継〈楓橋夜泊〉)に基く。
(10) 慶応義塾大学所蔵蒲松齢自筆詩集稿本『聊斎草』により、〝尚〟を〝倘〟に改めた。
(11) 張鵬展は嘉慶年間に山東学政の任に就き『続山左詩鈔』を編纂し、その際、蒲松齢の詩十三首を選定して収録している。『聊斎詩集』序は、嘉慶十八年のもの。
(12) Allan Barr, "A Comparative Study of Early and Late Tales in Liaozhai zhiyi", Harvard Journal of Asiatic Studies 45-1, 1985.

(付記)
引用詩句は『蒲松齢集』(一九八六年上海古籍出版社)所収『聊斎詩集』に拠った。